新年-丑年

私たち日本人が干支というと十二支（子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥）のみをさす場合が多いですが、本来は十干（甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸）と十二支の組み合わせを指します。十干は、甲（きのえ）と乙（きのと）、丙（ひのえ）と丁（ひのと）というように、「え」と「と」に２つに分けられており、それぞれ十二支との組み合わせが６つずつ決まっています。そうしてできる 60 の組み合わせは、中国の殷墟（いんきょ）出土の甲骨文字において日付を示すものとして既に用いられており、やがて月や年のほか時刻や方位にも用いられるようになります。日本への伝来は、日本書紀によれば欽明 14 年（553 年）、百済に暦博士の交代と暦本を求め、翌年百済の暦博士である固徳王保尊が来日したという記述がありますが、それよりも前に干支による紀年法が伝えられていたと考えられています。

最近では、干支のうちの十二支の部分だけを用い、それに十二命獣を配して年を表すことが多くなっており、日本では 12 年に一度巡ってくる丑年に、ウシがデザインされた年賀切手が発行されています。中国の文化の影響を受けた国々でも同様に年賀切手が発行されていますが、東南アジアを中心にスイギュウをデザインした切手も多く見られます。また、干支紀年法を用いない国々から、切手代理発行エージェントが発行した収集家目当ての切手が数多く発行されています。

郵便切手類模造等取締法に抵触する可能性がありますので、この頁の印刷は行わないでください。